

## 基礎看護技術における学生の能動的学習方法の転換へ向けての支援の取り組み

今村 圭子<sup>1)</sup>, 山口 さおり<sup>1)</sup>, 中俣 直美<sup>1)</sup>, 楠元 裕佳<sup>1)</sup>, 松成 裕子<sup>1)</sup>

**要旨** 看護技術の講義では、履修した知識を想起させ関連付けて理解することが必要であり、援助に関する判断力の育成、知識と技術を統合させ、看護技術を理解し、基礎技術を習得できるよう支援していく必要がある。しかし、履修した科目の知識不足を感じる状況である。予習復習など大学の勉強時間1日平均1時間も満たない現状であり、演習表、学習表などの記載状況から学習不足が基礎看護技術を受講する学生も例外ではないように推測された。そこで、事前学習、事後学習の定着を目的とし、従来演習後、実施したことを考察する目的で活用していた演習表に事前学習を提示し、小テストの導入、演習時のプレゼンテーション、そして学習表の形態を変更するなど試みた。その結果、学生の授業に出席する態度やディスカッションでの意見交換に変化が見られるようになり、このような取り組みが学生の能動的な学習姿勢への支援となっていることを確認できたので報告する。

**キーワード：** 基礎看護技術、能動的学習、事前課題、事後学習

### I. はじめに

1989年11校であった看護系大学は、2014年には288校と約26倍となり、「看護教育は大学で」という看護界の悲願は達成できている。しかし、少子化に伴い大学全入学時代による学力の低下があることも否めない事実である。安ヶ平ら<sup>1)</sup>は看護学生の「看護が目的でない学生が増加している」「読み書きや理解力の低下」「自分で目標を立てられず主体的な学習態度に欠ける」「考えるプロセスより正解を求める」といった特徴を明らかにしている。本学の学生においてもこのような傾向が見られる。

看護の実践の基盤となっているものは、基礎看護技術である。2007年、厚生労働省は「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」の中で学生の看護実践能力の強化を目的に、看護基礎教育終了時に習得すべき看護技術の種類と到達度が明確にした。本学においては2012年度新カリキュラムの導入に伴い、基礎看護学における看護技術に関する科目を、「看護基礎共通技術」と「基礎看護技術」とし基礎看護技術を教授している。初回講義時、

どのような技術を学ぶのか、そのための準備として何を学習したらよいのかということを確認できるように学習内容の範囲をテキスト（基礎看護技術・）とサブテキスト（看護技術が見える・）のページ数を提示した講義日程を配布し、学生が学習の準備ができるようになっている。学習形態は講義と演習を組み合わせ、講義と演習の比率を約1：2とし技術の習得に向けて演習時間を確保している。

当講座では、演習時に活用する演習表は、事前の自己学習として実施項目の根拠や注意点などを記載、演習後は評価および考察を自由記載で行い、事後学習したことを記載できるような形式とし活用していた。しかし、テキストを見ると簡単に分かるような根拠や注意点も空白のまま演習に臨んだり、演習後は考察ではなく手順を事細かに記入しただけのものであったりと事前・事後学習の不足を感じるようになってきている現状を垣間見、まず事前学習を定着させることが必要であると考えた。

看護技術の講義では、専門支持教育科目（人間と生命、

<sup>1)</sup>鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系 総合基礎看護学講座  
連絡先：今村圭子  
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1  
Tel/fax 099-275-6809  
e-mail: keiko-21@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

健康と医療等)で学んだ知識を想起させ、関連付けて理解することが必要である。援助に関する判断力の育成、知識と技術を統合させ看護技術を理解し、基礎技術を習得できるように支援していく必要がある。受験勉強で知識を得る訓練はできているがその知識を関連付けすることは、現状から察するに苦手なようである。関連させる知識の不足を感じる現状である。第50回学生生活実態調査によると予習復習などの大学の勉強時間は1日平均56.7分<sup>2)</sup>と1時間にも満たない現状であり、予習復習を行っていないことが伺え、上記の状況をふまえると本学においても例外ではないと思われる。そこで、2014年度履修科目と看護技術の関連付けと援助技術の原理・原則をおさえた基本的な援助技術の習得を目標に、演習表に事前課題を提示する形式に変更し事前課題を行い授業に参加することで能動的な学習態度へ変化することを期待した。その結果、課題はあるが少しずつ学生の学習態度の変化を感じている。そこで本稿では、演習表、学習表等の変更、演習時の学生のプレゼンテーションおよび小テストの導入をはかり、受動的な学習姿勢から能動的な学習姿勢への転換に向けた支援の取り組みの成果について報告する。

## II. 用語の定義

事前課題：授業・演習を効果的に進めるために提示する学習課題

事後学習：履修した教科の知識を整理したり疑問点を解決するために自主的に行う学習

能動的な学習姿勢：学習課題を確実にを行い、授業・演習などのディスカッションに自ら参加する学習姿勢

## III. 2015年度における看護基礎共通技術と基礎看護技術の講義概要

総合基礎看護学における技術の位置付けを図1に示す。

### 1. 講義形式

看護基礎共通技術の学習目標は、1)看護場面において共通して求められる基本的技術を実践できる。2)看護ケア技術の具体的な行動の立体的な構造を説明できる。3)看護ケア技術を習得することによって自分自身の看護観を表現できる、とし30時間2年次の前期に開講している。看護基礎共通技術に引き続き基礎看護技術を、1)日常生活のケア技術に必要な知識について学び、基本的な方法を説明できる。2)対象に応じたケア技術についてアセスメントできる。3)倫理的配慮に基づいた看護ケアを実践できる。4)ケアの評価や自己の行動特徴を客観視できる、の4つを学習目標とし90時間開講している。両教科、講義と演習を含めて180分の時間枠で教授

総合基礎看護学における技術の位置づけ

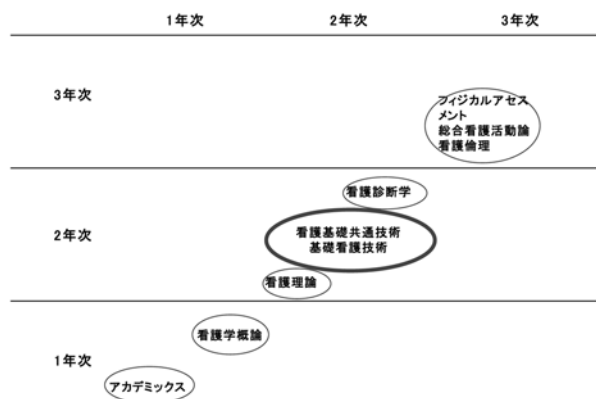


図1

している。

### 2. 演習形態

1グループ4～5名とし20グループに分けている。教員5名、ティーチング・アシスタント1名、単元により他領域の教員や本学附属病院から支援を受け指導を行っている。演習当日に学生の指導に関わる演習支援者と打合せを行い指導内容について共通理解をしている。

### 3. 2015年度の変更点と結果

#### 1) 演習表

演習表と講義・演習等の関連性を図式化したものを図2に示す。

変更前の目的、問題点、結果と変更後の目的、変更点と、受講状況及び演習表の内容の記述を分析した結果を表1に示す。

#### 2) 小テストの導入

小テストの目的は前期において、基礎知識の確認と技術の根拠を理解するためのベースとなる知識の確認であ

演習表と、講義・演習の関連性

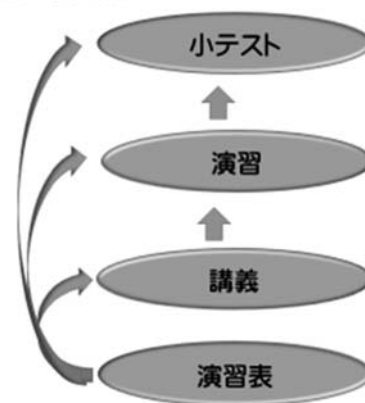
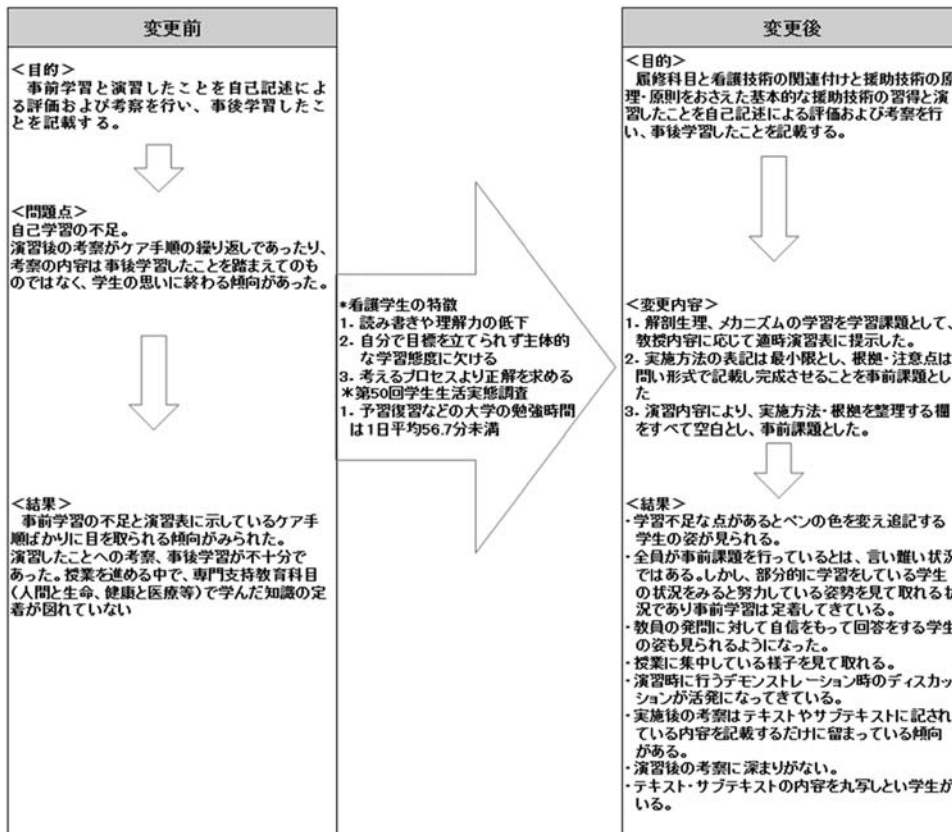


図2

り、事前課題により学習習慣の定着をはかるとした。後期は、基礎知識の定着と事後学習習慣の定着をはかるとした。小テストは前期・後期共に10点満点とし前期12回の平均点は7.9点、後期10回（2015年12月まで）の平均点は6.2点であった。

3) 学生による演習時のプレゼンテーションの導入  
従来、演習のデモンストレーションは、すべて教員が実施していたが、演習項目を精選し学生によるプレゼンテーションを導入した。実施中・後にディスカッションを行うことで事前課題を行うことの必要性を認識をする

表 1. 演習表



資料 1

基礎看護共通技術・基礎看護技術

学習表

グループ番号 氏名

平成27年 月 日	先週の実講後に残った疑問や問題をどのように解決しましたか、充足させた知識、自己学習したことを書いてください。	本日の講義・演習時間に残った疑問や解決しなかった問題は何か？それをどのように解決しますか、調べますか	本日受講し、感じたこと、考えたこと、講義・演習に対する要望など記述してください。
平成27年 月 日	先週の実講後に残った疑問や問題をどのように解決しましたか、充足させた知識、自己学習したことを書いてください。	本日の講義・演習時間に残った疑問や解決しなかった問題は何か？それをどのように解決しますか、調べますか	本日受講し、感じたこと、考えたこと、講義・演習に対する要望など記述してください。

ことで事前学習の定着と共に思考力、発言力の育成を図ることとした。

#### 4) 学習表

学習表とは、毎時の講義終了時に記述するリフレクションシート的な役割をもつものである。変更後の学習表を資料1に示す。目的、変更点と学習表の内容を分析した結果を表2に示す。

### IV. 考察

今回、取り組み実施した能動的な学習方法への支援の取り組みにおいて、事前学習、事後学習を習慣化し、学生が実施することが重要であることが再確認できた。よって、以下では事前学習、事後学習について考察する。

#### 1. 事前課題

今回、履修科目と看護技術の関連付けをはかるために、解剖生理、メカニズム、そして演習での学びを効果的にするために必要と判断した知識を習得し、授業に臨んで欲しい内容を事前課題として提示した。

事前課題は、授業をより効果的に進めるために授業前に提示された学習課題で<sup>3)</sup>あり、授業・演習の概要を把握ができ、また疑問点などを明確にすることができる未

知の学習内容の道しるべ的なものである。事前課題を提示することで、学習内容に不足があると、演習表にペンの色を変え追記する学生の姿が見られるようになり、「自己学習で分からなかったことが分かった」などの声が聞かれるようになった。これは、ただ単に正しい答えを知りたいということだけでなく、新しい知識を得たという喜びの表れではないかと考えられる。事前学習は授業・演習の概要を把握でき、学習内容の全体を俯瞰することができる<sup>4)</sup>。事前課題は、受講する準備を促し学が意欲を引き出すことに繋がっていると考えられる。さら

学習姿勢の変化と事前・事後学習の関係

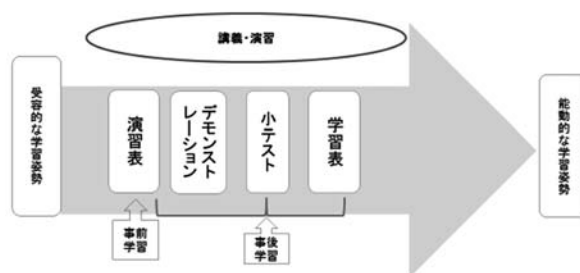


図3

表2. 学習表

変更前	変更後
<p>&lt;目的&gt; 授業の振り返りと学習課題と解決方法を明確にする</p> <p>&lt;構成内容&gt; ①前回の講義の疑問をどのように解決したか ②本時の講義・演習で疑問に思ったことをどのように解決するのか ③本時の感想など</p> <p>&lt;記入用紙&gt; B6版用紙1枚。</p> <p>&lt;結果&gt; 講義・演習で疑問に思ったことをどのように解決したのか、問題解決のための行動がとれたのか不確か</p>	<p>&lt;目的&gt; 変更前と同様</p> <p>&lt;構成内容&gt; 変更前と同様</p> <p>&lt;記入用紙&gt; A4版の用紙に変更し、4回分の記入</p> <p>&lt;結果&gt; ・学生の事後学習の状況が明確となった。 ・学習方法の把握をすることができるようになった。 ・事後学習に対して不足、修正がある場合は指導を加えることができる。 ・問題解決の内容はテキストやサブテキストに記されていることを記載するだけに留まっている傾向がある。</p>



に、教員の発問に対しても自信をもって回答をする学生の姿も見られるようになった。これは、事前課題を踏まえて授業を展開するため、学生自身授業に参加しているという意識が生じているのではないかと考えられる。これまでの、受動的な学習姿勢から参加するという能動的な学習姿勢への変化と捉えられるのではないだろうか。

また、演習時、教員が実施していたデモンストレーションを技術内容によって、学生がプレゼンテーションを行う形式を導入した。グループで実施するため、ある程度学生の学習状況を把握しグループを指定することもあるが、基本的に学生の自主性を尊重するようにしている。プレゼンテーション後の学生の笑顔は、学生自身が学習の成果を感じることができ、発表できたという安堵感と達成感であろうことが推測されるものである。また、発表するだけでなく、場面に応じてディスカッションを取り入れている。まだ積極的に全員が参加している状況とはいえないが、徐々に活発な意見交換が行われるようになった段階である。ディスカッション中や、演習中に「事前学習で分からなかった部分が理解できてすっきりした」と話す学生がいる。ディスカッションで意見を述べることで自信を得、いきいきとした表情で授業・演習を受講している学生もいる。授業時間内の学生同士の交流による学びあいの楽しさを学生自身が味わうことによって、さらに事前課題への動機づけが深まる<sup>5)</sup>。このような機会が増えることがさらに事前学習を定着させることに繋がり、能動的な学習姿勢への変化ばかりでなく思考力、発言力の育成につながると考えられる。しかし、事前課題を行っているにも関わらず、グループ間での意見交換ができない学生もいる。意見交換することで、他の学生が学習したこと、考えを聴くことで学びに繋がることが認識できていないということではないと考える。コミュニケーション能力の低下から人間関係の構築つまり仲間作りの困難さが意見交換にも影響を及ぼしていると考えられる。このような学生も意見交換ができ、グループにおける役割を認識できるよう工夫が必要と考える。

今年度から導入した小テストは学習予定の範囲内から問題を作成している。前期12回実施し10点満点中の平均点は7.9点であった。この結果からも事前学習は定着しつつあると評価してよいと考える。以上のことから、事前課題、プレゼンテーション、小テストなどの取り組みは、受動的な学習姿勢から能動的な学習姿勢へ支援に繋がっていると考えられる。

## 2. 事後課題

### 1) 小テスト

事後学習は、学習した知識を整理し、疑問点を解決するために自己学習することであり、そのことにより知識

の定着や学習を深めることにより新たな知識の獲得に繋がるものである。

2015年12月まで10回実施した事後学習（この場合は復習である）を目的にした小テストの結果は10点満点中の平均点は6.2点であった。この結果から、事後学習が不十分であると判断している。小テストのグループ毎の平均点は、グラフにて毎回提示している。よってグループ間で差が生じていることに気付くことはできている。しかし「グループの平均点を上げるために貢献したい。」といった近い未来の動機（他者と共有できるような動機<sup>6)</sup>）に至っておらず「だから復習をきちんとしよう」という思いには及んでいないため、小テストの結果を公表しても事後学習の行動へと至っていないと考えられる。

### 2) 学習表

事後学習の確認を行うことを目的に学習表の記入用紙の変更を行った。その結果、学習の状況と事後学習に対する姿勢に差があることを把握することができた。授業や演習で感じた疑問の解決方法として、テキストやサブテキストに記されている内容を記載するだけに留まっている状況を目にすることが多くなった。これは、安ヶ平ら<sup>1)</sup>が示す「考えるプロセスより正解を求める」という看護学生の特徴を示していると考えられる。求める答えがテキストやサブテキストに記されているとそこで満足し、もう少し調べてみようという探究する姿勢が薄くなっている傾向にあるのではないかと考えられる。高等学校までの受験で要求される記憶力と解答型の思考<sup>8)</sup>のためか、疑問を抱いたこと、理解できなかったことなどが理解できた時の喜び、知識を得た時の喜びを感じる体験が少ないのであろうか。しかし、看護を開発していく能力を求められている看護学生である。そのためには、常に多方面から考えることを習慣化させることも必要と考えられる。

### 3) 技術の反復練習

援助技術の習得において反復練習という事後学習は必要であることは言うまでもない。野村ら<sup>5)</sup>は、基礎看護技術への関心および必要性や身につけたい度合いが高いほど自己学習に取り組んでいたが、関心や必要性や身につけたい度合いが低いほど、自己学習に取り組んでいないと述べている。つまり、関心および必要性や身につけたい度合いが高ければ、能動的に行動することができるということである。この技術を身に付けることで、実習にいった時役に立つという、学生にとって重要な長期的な未来の動機付け<sup>6)</sup>が不十分であるためと考えられる。しかし、患者のイメージが十分にできない学生に、「実習で役に立つ」と投げかけても理解することが困難なこ

とかもしれない。当講座では、演習時に当学附属大学病院から支援をうけ、看護師から指導を受ける機会がある。この機会は患者の状況を知る機会となっている。そのため、援助技術を習得することの必要性の理解と反復練習の動機づけとなるような関わりを依頼することも必要と考える。

学生1人1人理解に至るプロセスは違う。だからこそ事後学習が必要であり、それを能動的な学習姿勢で実施することができるように支援することが必要であると考えられる。

以上、事前・事後課題について述べた。事前・事後課題は学生が学習目標を達成するために必要不可欠なことであると考えられる。学習目標を達成するため日々積み重ねの学習であり、これが習慣化することで授業へ臨む姿勢の変化に繋がる。教授する側も知識伝達型の授業から、学生が能動的に参加する授業へ転換する<sup>5)</sup>ことができるよう、事前・事後課題の内容を検討することが必要と考えられる。

## V. 今後の課題

授業時間内の学生同士の交流による学びあいの楽しさを学生自身が味わうことによって、さらに事前課題への動機づけが深まる<sup>5)</sup>。事前課題を強制的にさせられているという感覚の中で行っている学生、習慣化していない学生にとって、学びあう楽しさをいかに感じることができるような視点で授業の組み立てを再考することが、強制的に学習をさせられているという感覚をもつ学生を減少することにつながると考える。また、事前課題をテキストやサブテキストの内容をそのまま写す学生、課題を読み取れず不要な個所まで書き写している学生もいる。写すだけの学習が決して悪いこととは言い切れない。写すことが単に作業として行っていなければ何等か記憶に残るはずである。「やらされ感」の事前学習から自ら行う学習へと変えていく必要がある<sup>5)</sup>。そのためには、教員は教材観・学習者観・指導観を明確にし、目標を明らかにすることが、より効果的な事前課題を提示することに繋がることを認識し、努力することを惜しまない姿勢を持つ続けることが必要と考える。

## VI. おわりに

今回、能動的学習方法への取り組みとして、演習表、学習表、デモンストレーションの変更と小テストの導入を実施した。少しずつではあるが、学生の学習態度が変化していることを感じている。自分達も授業づくりに参加しているのだという意識の変化、さらに「看護技術っておもしろいよね」という声が発信され、能動的な学習姿勢が定着したという評価が出来るよう今後も検討を重

ねたい。

## 引用文献

- 1) 安ヶ平伸枝, 菱沼典子, 大久保暢子, 他: 基礎看護学担当教員のとらえる学生の特徴と教授学習方法の工夫. 聖路加看護学会誌, 2010; 14 (2) : 46 - 52.
- 2) 第50回学生生活実態調査, 2014.  
<http://www.univcoop.or.jp/press/life/info50.html>
- 3) 齋藤茂子: 「教える」から「学ぶ」へのパラダイム変換の時代に、事前課題の重要性を再考する, 看護教育, 2015; 56 (5) : 400 - 405.
- 4) 坂梨京子: 「事前課題」の意味を教えることから始めよう, 看護教育, 2015; 56 (5) : 406 - 411.
- 5) 野村晴香, 岡田久子, 平瀬節子, 他: 看護学生の基礎看護技術への関心と必要性および身につけたい度合と自己学習への取り組みとの関係. 高知大学看護学会誌, 2011; 5 (1) : 59 - 64.
- 6) 新福洋子: TBL (チーム基盤型学習) における事前課題の位置づけと効果, 看護教育, 2015; 56 (5) : 434 - 437.

# Approaches to Enhance the Active Learning Behavior of Students Taking Basic Nursing Technique

Keiko Imamura<sup>1)</sup>, Saori Yamaguchi<sup>1)</sup>, Naomi Nakamata<sup>1)</sup>,  
Yuka Kusumoto<sup>1)</sup>, Yuko Matsunari<sup>1)</sup>

1) Department of Fundamental Nursing School of Health Medicine Kagoshima University  
School of Health Medicine Kagoshima University 8-35-1,  
Sakuragaoka, Kagoshima City 890-8544, Japan

Address correspondence to: Keiko Imamura  
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan  
E-mail : keiko-21@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

## Abstract

When lecturing on the subject of nursing technique, it is necessary to make students understand what they learn by evoking and correlating them, and it is necessary to enable students to foster their ability of judging concerning help and also support them so that they can integrate their knowledge and technique, understanding and acquiring basic nursing technique. However, in reality students often feel their knowledge is lacking on the subjects that they have studied. Their study hours of preparation and reviewing of their university class work were less than one hour in average a day, and from the recording on training table and learning table, it was suggested that the students taking the course of basic nursing technique were not exceptions in their learning failure. Therefore, for the purpose of entrenching the practice of pre-learning and post-learning, pre-learning was presented on the training table that had been used for the discussion on what they practiced after the training. The introduction of quizzes, presentations during training and a change of the form of the learning table were attempted. As a result, changes were seen in the behavior of students attending class and the exchange of opinion in discussion. It was confirmed that these approaches provided support to enhance students' active learning behavior.

**Key words:** Basic nursing technique, active learning, pre-challenge and post-learning